

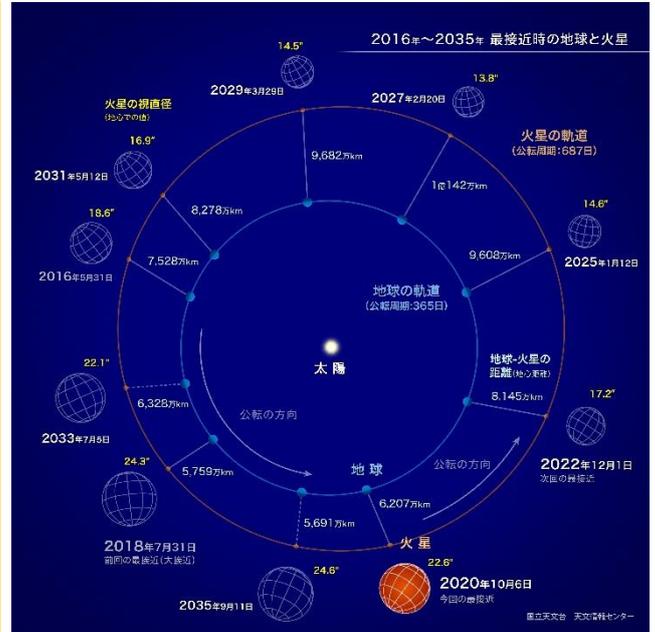
# ねん か せい さい せつ きん 2020年 火星最接近

発行：福岡県青少年科学館

## 火星の最接近とは？

夜空で赤く輝く火星は、地球の1つ外側を公転している惑星です。内側の軌道を公転している地球の方が公転のスピードが速いので、地球は火星に約2年2か月ごとに追いつき、追い越します。この時、火星と地球との距離が近くなることを接近と呼び、さらに、距離が最も近くなることを最接近と呼びます。地球の公転軌道がほぼ円形なのに対し、火星の公転軌道は少しつぶれた楕円形をしているため、2つの惑星の最接近時の距離は毎回異なります。

今回の最接近は2018年に次ぐ接近で、「準大接近」と言われています。2022年以降は、最接近時の距離が大きくなる時期が続くため、見た目の明るさや表面の様子を観察を楽しむには、今回が好機なのです。



最接近時の地球と火星 (国立天文台 HP より)



9月17日  
22時の久留米の空

火星が見える位置 (ステラナビゲータ11/株式会社アストロアーツ)

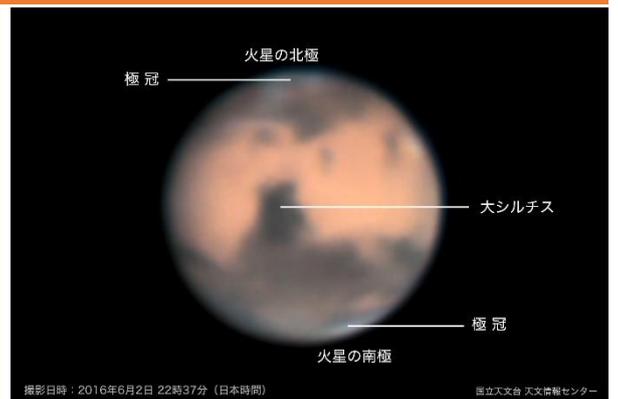
## 火星はどのあたりに見えるの？

火星は9月上旬から11月上旬までマイナス2等以上の明るさを保ち、観察しやすい時期が長く続きます。火星は、星座の中を少しずつ動いて見えますが、1月頃まではうお座のあたりに見えます。うお座はペガサス座の一部である、秋の四角形を囲むような星の並びが目印です。うお座付近には明るい星が少ないので、赤く輝く火星はすぐに見つけることができます。日没後の早い時間帯では高度が低いので、9月中は22時以降に観察するとよいでしょう。

## 望遠鏡を使うとどう見える？

火星表面の大部分は酸化鉄(赤さび)で覆われているため、赤っぽい色に見えますが、岩石の成分の違いや地形の影響による黒っぽい模様がところどころにあります。最も大きく分かりやすい模様が「大シルチス」です。大シルチスは大きな楕円状火山で、黒っぽい色は玄武岩質の火山岩の存在に由来します。オランダの天文学者クリスティアン・ホイヘンス(1629～1695)は火星の自転周期(約24時間37分)を調べるためにこの模様を継続観察したそうです。

また、北極と南極には極冠(きょくかん)と呼ばれる白い部分があります。これは水の氷の上を、二酸化炭素の氷がおおったものだと考えられています。今回の最接近では南極冠が見えますが、今の時期は火星の南半球の季節は夏で、南極冠が小さい時期にあたります。



撮影日時：2016年6月2日 22時37分 (日本時間)

国立天文台 天文情報センター

望遠鏡で観察した火星 (国立天文台 HP より)